

小松城について

(この説明文は【小松の歴史について】と同じ文章です。)

小松城(別名:蒲田城)は西暦1360年(正平15年)に菊池氏・肥前守・菊池武安によって築城された。クリークを利用した環濠集落的な水城で平城でした。位置は神埼郡蓮池村小松の小松神社を中心に城が形成されていた。小松神社の南側に本丸・二の丸が建ち、家老屋敷が配置されていた。本丸・二の丸は小高い丘に建つ平屋建ての城であった。城郭は江湖(佐賀江川・中地川)やクリーク・東側に泥田堀を利用した水城でした。

菊池氏一族の本拠は肥後国菊池郡菊池村深川(現在の熊本県菊池市)にあった。のちの菊池武政のときに隈府に城を移した。平家台頭後は日宋貿易に熱心だった平清盛が肥後守に就任するなど、平家による肥後国統制が強化されると、菊池家は平家の家人と化した。1180年に源頼朝が兵をあげると、翌1181年6代の菊池隆直は【養和の乱】を起こして平家に反抗した。隆直は翌年、平貞熊の追討軍に降伏し、以降は平家の家人として治承・寿永の乱(源平合戦)に従軍した。しかし、壇ノ浦の戦いにおよんで源氏方に寝返り御家人に名を連ねていました。源平の間を揺れ動いたことで、源頼朝の疑念を招き、隆直への恩賞は守護に任ぜられた少貳氏や大友氏・島津氏には遠くにおよばず、逆に多くの関東系御家人を本拠地周辺に配置され、監視を受けるようになりました。菊池氏は、伝統的に源平勢力と一定の距離を保ち、在地勢力の勇としての意地を見せてきたが、鎌倉幕府に衰えが見られるようになると、朝廷とのつながりを深めていきます。室町時代になると、19代の菊池持朝のころから菊池氏一族の間で家督をめぐる争いがもちあがるようになっていました。1504年以降、菊池氏の家督は庶流から輩出されるようになり、菊池氏の家督は阿蘇氏や大友氏に横取りされ、菊池氏は滅亡しました。肥後国には、菊池氏の遺領は、菊池氏の三家老といわれた赤星氏・城氏・隈部氏等が領するところとなりました。

小松城を築城した菊池武安(たけやす)は13代・菊池武澄(たけずみ)の嫡男です。父・菊池武澄(たけずみ)は建武の新政のとき、12代当主・菊池武時の戦功により後醍醐天皇より肥前守に任じられていました。菊池武安(たけやす)は菊池武光の命により、1360年の大保原の合戦後、肥前の少貳氏の攻略のため、少貳氏征伐の牙城として仁比山城にもどりました。

菊池武安(たけやす)は、仁比山城を本城にして、姉川城、本告牟田城、松崎城、横大路、菩提寺城等に支城を築きます。

小松城(別名:蒲田城)も同時期に菊池氏の支城として築城されました。

菊池武安(たけやす)は肥後菊池氏の後援を得て、高木、竜造寺、千葉、松浦党を次々に撃破したが、少貳氏・少貳頼尚によって仁比山城を攻められ敗退しました。少貳頼尚に敗れて以後は、支城の姉川に落ちて、姉川城に居城して【姉川氏】と称しました。

小松城(別名:蒲田城)はこの時に一時廃城になったと思われます。

【姉川氏】はそれ以降、少貳氏～竜造寺氏に仕えました。

小松の地を平安時代にまで遡ってみます。

平安時代の1185年に、平家が源氏に壇ノ浦にて敗北したので、平家の平重盛を祖とする一部の子孫(落人)は源氏からの逃亡の末、小松の地にたどり着き落ち延びます。

室町時代の1220年頃に、平家の落人は、源氏が滅んだあと北条氏の世になり、小さな祠(ほこら)を建立し、仁徳の高かった平重盛公を小松大明神として祀り、小松社と称し心のよりどころにする。また、小松の平家浮立はここから始まり、平家の存在を鼓舞する祭りができるようになります。

室町時代の1330年頃、小松内がクリークを利用した環濠集落として 形成されていきます。

室町時代の1360年頃、菊池氏(肥前守・菊池武安)により小松城(別名:蒲田城)が築城されます。(クリークを利用した環濠集落的な水城)

1377年、菊池武安は牙城としていた仁比山城を少貳氏より攻められ、敗れた武安は支城の姉川に落ちて姉川氏の祖となります。姉川氏はその後少貳氏～龍造寺に仕える。

同時代の1540年、犬塚氏(鎮家・しげいえ)【別名:犬塚弾正・犬塚盛家】により小松城(別名:蒲田城)を修築し、居城します。

犬塚氏一族は当初、筑後国三潁郡犬塚郷(現在の福岡県大木町)を本拠としていた。

明応年間(1492年～1501年)に、犬塚家貞が肥前国神埼郡蒲田郷に崎村城を築いた。その後、蒲池氏から独立して少貳氏の武将になった。家忠の長男・家直は崎村城主(東犬塚氏)、次男の家重は蒲田江城主(西犬塚氏)、三男の家種は本家・崎村城の家直を補佐し、西牟田氏の祖となった。四男の家久は直鳥城主、五男の家喜は古賀館主となった。

同時代の1559年、直鳥城の犬塚家清とその嫡男・尚家の親子が大友宗麟の命により筑後の諸将と共に筑前侍島の筑紫惟門を 攻め、共に宝満岳で戦死する。この結果、尚家の実弟である小松城主の鎮家(しげいえ)が直鳥城の家督を継いだ。

この時点で、小松城(別名:蒲田城)が城としての機能が失われたと思われます。(廃城となる。)

後年、鎮家(しげいえ)は西犬塚の蒲田江城の所領をも相続して、蒲田江城に居住するようになります。

当時は東犬塚家(崎村城)だけでなく、犬塚一族全体が大友配下で、少貳配下でした。
故に、従来通り大友配下として、当時敵対していた龍造寺氏とは対峙していました。
しかし、この頃から、少貳氏配下にあった犬塚一族は、龍造寺氏が台頭するにつれ、少貳氏から龍造寺氏へと変わっていきました。
問題は犬塚一族が大友配下の状態で龍造寺配下になったことです。
当時はまだ直鳥犬塚家は、大友配下の一本でしたが、東(崎村城)西(蒲田江城)犬塚家は、大友配下にして龍造寺配下でした。

同時代1569年、大友軍が龍造寺討伐に動き始めます。大友宗麟が自ら大軍を率いて肥前侵攻を開始しました。
東(崎村城)西(蒲田江城)犬塚家は、大友か龍造寺という究極の選択を迫られます。
東犬塚家(崎村城)は龍造寺を選び、西犬塚家(蒲田江城)は大友を選びます。
直鳥犬塚家は元々が、大友派だったので、犬塚鎮家(しげいえ)は西犬塚家(蒲田江城)を支持します。

この様なこともあり、犬塚氏では、東(総領家・崎村城)と西(次男家・蒲田江城)で骨肉の争いが起きていました。
総領家の座を巡る争いとも言われています。総領家(崎村城)では男子に恵まれず養子で繋いでいました。また、外交方針で決定的な対立がありました。
この頃は、既に少貳氏は龍造寺隆信によって滅ぼされており、【少貳配下にして大友配下】であった犬塚一族は、少貳の滅亡と龍造寺隆信による西犬塚家(蒲田江城)への政略的な婚姻関係もあり【龍造寺配下にして大友配下】になっていました。
つまり、龍造寺隆信が犬塚家一族の争いを治める立場にあったわけです。

しかし、龍造寺隆信は、数少ない貴重な駒である妹を西犬塚へ嫁がせてでも、本家である崎村の東犬塚よりも、分家である蒲田江の西犬塚と縁戚関係になることを重要視したのはなぜでしょうか。
佐賀江川を西に進むと神埼郡から佐嘉郡へと入ります。佐嘉郡における河川・寄港地が龍造寺エリアである【今宿】でした。
【今宿】から望むと、城原川と佐嘉江川が分岐する河川の起点となる【蒲田江】と呼ばれる土地は、当時は河川港立地条件の全てを満たす一等地で、隆信が欲しくてたまらなかったことは間違いありません。
龍造寺隆信の姉や妹は、一族婦女子の中での地位は高かったはずで、嫁ぎ先は全て政略結婚でした。
その数少ない貴重な駒を西犬塚家・蒲田江の犬塚尚重に嫁がせるとは、隆信にとって、いかに蒲田江が重要な土地であったかをうかがい知ることができます。

この様な状況の中で事件が発生します。西犬塚(次男家・蒲田江城)の尚重は、東(総領家・崎村城)の鎮直を謀殺します。
西犬塚(次男家・蒲田江城)の尚重も、返り討ちにあって死亡しました。
龍造寺隆信は西犬塚の蒲田江城を攻撃します。西犬塚の尚重の長男は龍造寺(手を下したのは鍋島直茂)に殺され、次男・信尚(生母が龍造寺隆信の妹)は助命されました。
後に、信尚は茂統と改めました。そして、龍造寺隆信は信尚の父・鎮直の忠死を憐れんで、旧領(三根郡)を信尚に与えました。
信尚はのちに龍造寺の姓を与えられました。

この時の龍造寺隆信による西犬塚家・蒲田江城の攻撃により、蒲田江城は一度落城します。直鳥の犬塚鎮家(しげいえ)は筑後に亡命しました。

当時は、神代しかり、犬塚しかり、筑後国人が新天地として土着するのが肥前なら、肥前国人(代表的な人は龍造寺隆信)が敗戦して亡命していくのは筑後でした。その筑後は鎌倉時代の頃より大友支配下にありましたので、【寄らば大樹】の大樹は大友氏というのが通説でした。
肥前国人が筑前へ亡命したり、大内氏の後ろ盾を得るときは、大友氏と敵対又は謀反して、他に頼る相手がいない時だけです。

しかし、ここからが鎮家(しげいえ)のすごいところです。
彼は物凄い武勇の持ち主でありました。
龍造寺隆信より【有馬の戦いに彼らの武勇が必要な件】ということで呼び寄せられ、筑後から肥前へ帰還します。
そして、かつての西犬塚の居城・蒲田江城を復興します。
肥前藤津郡城での戦いでは、先陣として活躍した犬塚鎮家(しげいえ)は、両弾二島(龍造寺氏配下の武勇優れた4人)の一人に数えられるほどに出世していきます。
その功績により、犬塚鎮家(しげいえ)には森岳城(後の島原城)が与えられました。
この時点で蒲田江城は廃城になりました。
現在、蒲田江城本丸跡には、豊田秀吉の命で鍋島直茂が建立した鎮西出雲大社が鎮座しています。